

あゆみ通信

VOL. 103

 あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 浪花博
広報 本持喜康

近畿連区研修会に 第2組からも参加



2017年5月29日～30日、香川県「琴参閣」において「第44回近畿連区同朋の会推進研修会」がテーマ「真宗門徒の生活－推進員とは－」のもと開催され、推進員・門徒・住職・寺族・坊守約150名が参加した。1日目の講義の後で、13班に分かれて座談会も開かれた。あゆみの会からもは、浪花博会長、加藤徳江さんと細川克彦・孝子の4名が参加した。

中川皓三郎先生は「浄土真宗」という講題で、仏教において一番元にある縁起法は、私たちの苦しみの原因は「無明」にあること。また私たちは共に生きている(相依相待する)ものであると。そして、私たちは「私」を前提に生きているが、それは「自我」であるから、互いに傷つけ合っている。教えは「ただ念仏しなさい。そして私たちが悪人であることに気付きなさい」と。気付いた時「ごめんなさい」と頭が下がる。つまり、「南無」出来る。

「選ばず、嫌わず、見捨てず」の阿弥陀仏の攝取不捨の大悲に目覚めることが信心であり、そこから同朋として生きる人生が始まる。その人生を浄土真宗と言いますと力強く話された。

細川 克彦でした。
(皆さん、ご苦労様でした。)

念仏は自我の破れる音である 大河内了吾



大河内了吾先生像

なんと強烈なことばであろう。驚きである。

もともとぬくぬくと何不自由なく生

活している人には感動は得られないかもしれない。実はどれだけ欲望のままに生き、豊かな生活をしていても越えられないのが虚しさである。人はこの虚しさとしっかり向き合うべきなのに、現実には忙しさの中で、その事実を知ろうとしない。ともすれば念仏を無い物ねだりの手段として

しまう。また、現実の苦しみから逃れるために念仏を称えてはいないか。大河内先生は、念仏のはたらきとは、どこまでも自我のとらわれの中で念仏している我々に、大音声になって「目を覚ませ」と呼びかけてくることと言われる。念仏は自我の執着からの目覚め、自我を打ち破るものであり、感動である。

[大河内了吾先生=1897-1976
愛知県生まれ、浄土真宗の僧・
仏教学者～事務局註]
(愛知県一宮市・養蓮寺「法語」
より引用)

これからの第2組行事

参加される対象がいろいろあります。ご注意を。

●第2組真宗入門講座(推進員養成講座受講者対象)

日時：7月8日(土) 午後2時
会場：光照寺(天王寺区上汐)

●第2組所長巡回(住職、寺族、門徒会対象)

日時：8月21日(月) 午後6時
会場：了安寺(天王寺区生玉寺町)

●第2組聞法会(住職、寺族、門徒、推進員対象)

日時：8月25日(金) 午後2時
会場：唯専寺(浪速区敷津西)

●第2組真宗入門講座(推進員養成講座受講者対象)

日時：9月2日(土) 午後2時
会場：行圓寺(西成区山王)

自力無効?

この頃、この言葉に簡単に頷けなくなっている自分がある。「ただ念仏するだけ」でええのかと。確かに真宗では善行などの修行などは要らず、ただ念仏すればお浄土に迎えられると教えられた。

では親鸞聖人は、何もなさらなかったのか。そうではない。亡くなる直前まで経典を学ばれ、いろいろな著作を作られている。凡夫の我々が、出来る時に出来ることをすることの上に、他力(仏のはたらき)があるのではないかなれば、力を尽くして、聞法会に足を運ぶしかない。(本)

真実功德は誓願の尊号なり

「尊号真像銘文」

第2組聞法会報告



2017年6月14日(水) 午後2時から「共に学ぶ『正信偈』が専行寺(武石由美住職)をお借りして開催、住職、寺族、門徒、推進員24名が参加した。講師は引き続き新田修巳先生(平野区正業寺)をお招きし、「正信偈」の天親菩薩の「依修多羅頭真実 光闡横超大誓願」についてお話いただいた。先生は「尊号真像銘文」より「真実功德相というは、真実功德は誓願の尊号なり。相はかたちということばなり」を引かれ、尊号を身に保つ人は心が豊かさに満たされる。また、聞法とは「聞かせていただく」ということであり、誰と出も出あえ、あらゆるいのちとつながっていけると話された。

新田先生法話の要旨



先生は「尊号真像銘文」の「功德相」つまり、心が豊かで満たされるとはどういうことだろうか、と問いかけられた。テレビ番組で、百歳の長寿を迎えた人の精神的傾向として「見えない人とのつながりを感じて、孤立感が無い」ということを挙

げていたが、それに当てはまるのは無いかと。

また、先生が学生の頃がんで亡くなった作家高見順氏の詩集「死の淵より」の「帰る旅」という詩で「故郷に帰る旅だから楽しくないはずはない」という言葉に感動されたことや、同じ頃、友人と運命について「運ばれる命」ではないかと友人が語って自分も同感したこと。また、40歳程度離れていた歌人・萩原よし江さんとの自坊での出会いと歌集「山雨」の「色身の果つるきはまで負ひゆかむ、宿業かなし、御名称へつつ」が心に残っていること等話され、身は離れてしまっても、そこにいつまでもつながりを感じ、今も対話できる、そんな世界



が私の中に開かれている。それが真実功德相ではないかと話された。また、聞法は理智分別を超えたところから始まる。お経の初めの「我聞きたまいきは私は聞かせていただいた」という謙譲の心をあらわし、自分の考えを一旦遮断して、虚心になって信じないと聞かえてこない。

詩人八木重吉は「私のまちが良かった 私のまちが良かった こうして草にすわれば、それがわかる」を引かれ、聞法とは頭が下がるとことであ

る。虚心に、つまり心を開いていくと、誰とでも、御同朋御同行として尊敬し出会っていける。あらゆるいのちと繋がっていける。そういう場を賜った時、幸せということになるのではないかと。

また、虚心すなわち無心になるとは、一心になるということ。それは母親の視線を感じ、安心して遊んでいる幼児に似て、その時阿弥陀の大悲、視線をこの身に感じる、それを信心と。

信心は理性で証明できないし、する必要もない。この身に実感していくものであると話された。

(細川 克彦氏による要約)

「銀杏通信」に2組の報告が

パソコンで、第2組の活動



が掲載されています。

インターネットの「銀杏通信」を呼び出しますと、第2組の活動のレポートが出てきます。「銀杏通信」は、真宗大谷派大阪教区のホームページ。教区をはじめ全27組の活動がスマートフォンやパソコンで見ることができます。ヤフーかグーグルで、「銀杏通信」と書き込んでください。見ることができます。